

同時に二人を愛した詩人の胸に迫る詩物語^{うた}

きみにおくる恋歌 時のなぎさ

きみにおくる恋歌 風の手紙

うづき さい
卯月 采

内容紹介 きみにおくる恋歌 時のなぎさ

卒業後はじめてのクラス会に現れた旧友。ヒマワリのピアスが、宴を魅了する。「恋人四人」の彼女とのデート。スクリーンにフラメンコが繰り広げられ、篝火のゆらめきに現れては消える幻の小面（こおもて）。思わず男は、友の横顔を見つめるのだった。また別のとき、自分たちと同じ姓の表札を探して、花咲く郊外をそぞろ歩いた。そしてある初秋、思いの込められた手紙が届く。男は号泣する。悟りに達し得た禅僧のように！ 期せずして受けた手術は、彼女への贖罪だったのだろうか。いまや迦陵頻伽となった友に書き送る花の便り。子午線の彼方の浜辺で、ふたりの幼子はいつまでも遊びやめない。前書きが詩で書かれているのがユニークで、しかもクイズつき！

内容紹介 きみにおくる恋歌 風の手紙

人は昔、鳥だったのか、羽ばたき、さえずり、水浴びもして、友を求めて、飛びつづける・・・ある夕方、売り子が勤めるスーパーで買い物中、男は思いもかけない夜闇の深淵を見る。雨がそぼふる宵に、初めての歌を遂に手渡す。やがて彼女が辞めたことを知る。絵手紙を描き送ろうとしていると一匹の猫が現れ、絵を舐め、手を舐め、まつわりやめないのだった。約束の街角で待ちつづける或る日、相手が転居したことを知って詠った歌は、本書の絶唱といえよう。隠者の思いから脱して間もなく、猫が再来する。男が再び街角で待ち始めた或る日、彼女が姿を現したのだった。男は独り号泣する。やがて二人は永遠を求めて旅をし、夕べの湖畔で光と闇を語りあった。その後詠われた「郷愁」と「合わせ鏡」から「日本のエデンの園」を発想する読者はいないだろうか。文化勲章受賞者から花丸をもらった喜びを、前書きが物語る。

コメント 手紙の衰退と愛の衰退

手紙は、文学の世界には無くてはならない存在の一つだが、今は急速に IT 機器に取って代わられつつあるようだ。「きみにおくる恋歌」二編も、あと十年も遅かったら、世に出ることはなかったかもしれない。便利さ、快適さを求めて、文明は進化を早めてゆく一方で、喪われてゆくものは無いのだろうか。

ある折に「風の手紙」を手に、ページをめくっていた年配の男性が、ふと感に堪えた声で、こう言った。「今どきの若者は、こんなことは無いでしょう！」

指さす箇所を読んで、納得した。曰く「EMERALD って書いてある横に俺のチャリンコ停めただけで もう体じゅう熱くなるんだ」

恋愛中の若者の体が熱くならないのは手紙を書かなくなったため、という訳では必ずしもないだろうが、如何にもありそうなことだと思わざるを得ないほど、時代は移り、文明は進歩発展の度合を高めている。結構至極なことだと思ふ一方で、養老孟司氏の説くような「脳化」「都市化」が各地、各国で拡大、深化を早めてゆくのでは、という不安も高まってゆく。

恋愛にまつわる感覚・感情は時代により、場所により、当事者により様々だとしても、時を超え、所を超え、共通するものの方がはるかに多いと思われる。「風の手紙」に収められた詩だけでも「診察室」「風と遊んで」「地球」「神さまの庭」「うっとりくらげ」「太古のこぼ」等で詠われている感覚・感情描写には、千古の昔から変わらないであろう恋愛感情の様相の一端が、実況報告的に描かれている。

身の回りが多種多様な、どれも同じような、ロボットで溢れる時代が遅かれ早かれ、到来するかもしれない。人間がロボットを造り、操るだけではない。人間の心が、精神の成り立ちが、ロボットに似てくるのではないか・・・たとえ恋人同士でも、そのことに気づきもせず、気づかれもせず。

西洋発の「文明の進歩」が世界を、歴史を、人々の暮らしを大きく変えてきたことは疑いない。そのインパクトは、容易に語り尽くせるものではない。最高点を与えられないとしたら、何が問題だろう。

世界の歴史を見渡せば、征服と被征服の繰り返しである。西洋とて例外ではない。そこには、征服欲という根強い性向がある。手っ取り早い例が「山」に対する、標準的な西洋人の心理的な反応だ。山を見て頂上まで登り、旗を立てようと思う標準的日本人は、どれほどいるだろう。

海は誰のものか。そこに棲む、あるいは利用する、すべての生き物のものではないだろうか。地球はだれのものか。そこに棲んできた、今棲んでいる、そしてこれからも棲みつづける、生物すべてのものではないだろうか。現在、国境としてあるのは、ヒトの長期借用にすぎない。

海に、空に、地球に、宇宙に、生きとし生けるものすべてにとって、征服的ではない、もっと親和的なパラダイムが現れてほしい。そんな願いを込めて詠った一節を両詩集から、ほんの二、三行、抜き出してみよう。

その昔 世界は 果てしなく広く・・・生きとし生けるものは

おなじ目線で暮らしていた (時のなぎさ もっちゃん)

きみの胸のなかに 花が咲いている・・・

ぼくの胸のなかには カエルが棲んでる (風の手紙 郷愁)